第3章

写真で辿る東彼杵町の歩み

遠い日の郷土の風景や、そこで営まれる人々の暮らし……
アルバムをめくるように昭和から平成までの町の変遷をひもとけば、きっと新しい発見があるはず。

すっかり見慣れた身近な景色も、時間というフィルターの向こうに、今まで知らなかった新しい横顔を見せてくれるでしょうか。

『ふるさとの思い出写真集』（東彼杵町教育委員会編）には、町役場の記録のほか、町に暮らす人びとの協力のもとに集められた貴重な写真が収められています。この写真集を中心に、昔と現在の風景とを照らし合わせながら、小さな時間旅行に出かけましょう。

当時を知る人には懐かしく、若い世代には新鮮な、もうひとつの東彼杵町がここにあります。

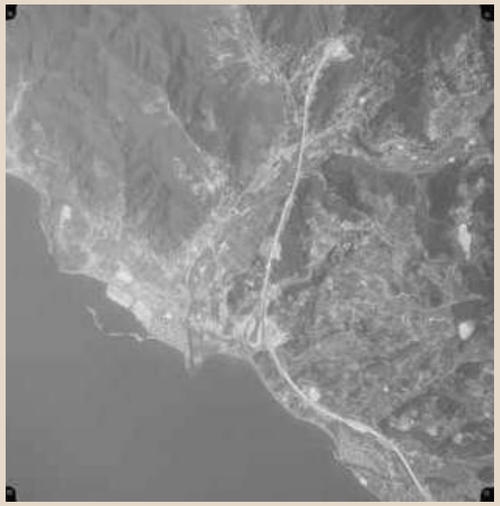
1 変わりゆく郷土の姿

上空から見下ろしてみれば、人々の暮らしとともに変化を続けてきた町のありようが、改めて実感されます。なかでも長崎自動車道の開通は、長崎県における人と物の流れに革命をもたらしたともいえるでしょう。いつの時代も、交通の要衝としての大きな役割を果たしている、私たちの町なのです。

昭和三十七年（一九六二）撮影、東彼杵町周辺の航空写真。
東彼杵町発足三年後、町役場の新庁舎が落成した一年後の町の様子。※

昭和五十年代、東彼杵町周辺の航空写真。
新彼杵港第一期工事完成、新千綿漁港完成の前後。

平成十五年（二〇〇三）撮影、東彼杵町周辺の航空写真。
町民グラウンドが整備されている。東彼杵郡三町の合併協議が始まったころ。※



平成元年(一九八九）撮影、東彼杵町周辺の航空写真。
建設中の長崎自動車道俵坂トンネルの貫通式の翌年。
※

平成二十六年（二〇一四）撮影、里郷串島周辺の航空写真。
変化に富んだ海岸線、美しい棚田。いつの日も変わらぬ緑豊かな風景が広がる。※

平成二十年（二〇〇八）撮影、東彼杵町周辺の航空写真。
前年にJR彼杵駅の新築落成。長崎新幹線建設ルートについて話し合いが進められていた。※

※出典：国土地理院ウェブサイト

2 懐かしき町並み

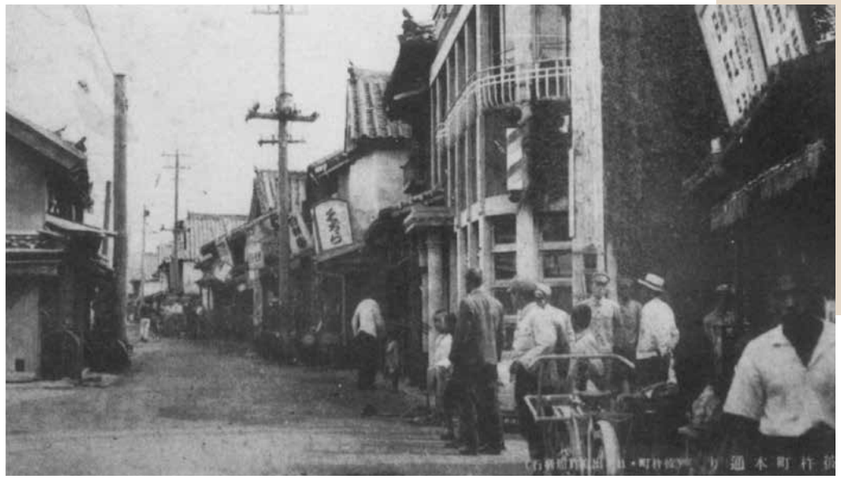
長崎街道の宿場町、彼杵と千綿。昭和期の町並みには、昔懐かしい古い宿場町としての風情が漂っていました。活気に溢れた商店街、瓦屋根を並べる木造建築の家々……遠い日のモノクロームの記憶が蘇ります。

元禄波止と八坂神社

大正十五年（一九二六）ごろ。彼杵祇園祭にて、神社を出る勇壮な男たちの道踊り。

昭和初期の元禄波止。「彼杵名所」として、竹屋自動車部発行の絵はがきから。

昭和四十九年（一九七四）の港の様子。松の木は、戦後に枯れてしまったという。（永島正一著『続長崎街道』より）



思案橋から

昭和十五年（一九四〇）、彼杵町町制記念、日の出写真館発行の写真より。思案橋から東の本通りの様子。この先に丁子屋醸造本店があった。

昭和十五年（一九四〇）、彼杵町町制記念、日の出写真館発行の写真より。思案橋から北、嬉野方面への本町通り。

現在の元禄波止と思案橋付近（左）

千綿宿

昭和三十七年（一九六二）、千綿女子農業学園からの千綿宿。左手は郡岳、中央の小山は飯盛山、右は武留路山。

彼杵宿

彼杵本陣跡は明治期より彼杵神社となっている。昭和四十九年（一九七四）の様子。（永島正一著『続長崎街道』より）

改装前の親和銀行彼杵支店。明治三十五年（一九〇二）設立の彼杵銀行は、大正末に大村銀行彼杵支店、昭和十六年（一九四一）親和銀行彼杵支店になった。赤レンガ門は新社屋に移された。

昭和十五年（一九四〇）の彼杵駅通り。正面奥が駅、右の門柱は登記所のもの。